

ものがたり

# 慈濟

香港・宏福苑火災の後





撮影・黄筱哲

## 人生における大きな幸福とは

● 扉の言葉 文・證嚴法師 訳・濟運

この世には愛があり、お互いに助け合い、  
あらゆる思いを善に向け、日々福を造るのです。  
清らかな心に地球も浄化され、福德は無量となり、  
人々は仲良く、世の中も平穏になるでしょう。



香港・大埔地区にあるマンション宏福苑で11月26日に発生した大火災は、43時間にわたって燃え続け、延べ2千人以上の消防士を動員して、消火・救援に当たった。住む家を失った1千世帯を超える人々に対し、慈濟香港支部は緊急に、慰問金を配付した。(撮影・牟晏瑩)



慈濟日本サイト

# 目次

【編集者の言葉】

新しい年の無病息災を願う

善耕／訳 4

【特集】

洪水と火災 同時に支援——

御山凜／訳 8

香港の大火災

アジア各地の洪水被害

香港・高層マンション群火災 長い夜に捧げる祈り

10

インドネシア・スマトラ島 サイクロン・セニヤールによる洪水

島だが孤立していない

葉美娥&林欣怡／訳

28

タイ・南部の洪水被害

緊急支援！物資搬送車が千里を駆ける

惟明／訳

44

【グローバル慈善】

ブツダガヤ・職業訓練

楊琇光／訳 52

成功した初めての起業

【證嚴法師のお諭し】

慈願／訳

62

世の平安は人生最大の幸せ

【老後に望むこと】

楊琇光／訳

68

チームが引き継いで

高齢者を敬う

——全住宅ケアと全人ケアの記録——

【行脚の軌跡】

濟運／訳

100

蟠りの無い心

慈濟の出来事 1/12 | 2/10

濟運／訳

106

## 新しい年の無病息災を願う

十二月上旬、第一期の歳末祝福会及び認証授与式が無事に終了し、台湾の慈濟ボランティアのほぼ半数が、證嚴法師と常住師父から福慧お年玉を受け取った。二十日間以上に及んだ法師の行脚の間、各地のボランティアたちは静思堂に集まり、「菩薩の新メンバー」の誕生を喜ぶと共に、四大不調で生じた災害による人々の苦しみに心を痛めた。

十二月八日に第一期最後の歳末祝福会が終了すると、翌日の九日には、二日間にわたる大規模な慰問金配付を終えたばかりの香港の慈濟ボランティアたちが台湾に到着し、高層マンション群「宏福苑」で起きた大規模火災と、彼らが行った被災者ケア支援について報告した。彼らは火災を知って直ちに現場

近くに駆けつけると、恐ろしいほどの炎が遠目でも見られ、傍らには被災して衝撃を受けた住民が涙に暮れていた。彼らは家を失った住民の悲しみを自分のことのように受け止め、朝な夕なに慕っていた法師を前にすると、時折声を詰まらせながら、まるで愛する家族に思いを吐露するかのよう話した。

「香港の火災は本当に深刻です。あの時、私は一日中あなたたちのことを思っ心配していました。特に、そこに住んでいた慈濟人は今、どこに身を寄せているのですか」。その優しい思いやりのお言葉と、それに続く災害支援の指示に、弟子たちは計り知れない思いやりと後押しを感じた。

慈濟は慈善志業から始まったが、災害支援を行う際はいつも、異なった状況に直面し、様々な困難を克服する必要があった。「ボランティアは招かれなくてもやって来ます。私たちは積極的に行動する必要があり、それが私たちの使命なのです。人生は無常ですから、私たちは、最善のケアを提供するの

です」。法師はボランティアに、短期、中期、長期にわたる支援の方向性を整理して明確に示した。特に火災後の心的外傷からの回復には、カウンセリングと長期にわたる寄り添いが必要だと論じた。

この火災では、九人のインドネシア人と一人のフィリピン人家事手伝いを含む百六十一人が亡くなった。香港のボランティアは、犠牲者の故郷にいる家族と連絡を取る一方で、故郷の現地ボランティアを通してケアを提供する計画である。

ほぼ同じ頃、東南アジアのインドネシア、タイ、マレーシア、フィリピン、及び南アジアのスリランカでも、モンスーンやサイクロン、洪水、土砂災害などで大きな被害が出ており、二千人以上の死傷者が出ていた。各国の慈済ボランティアも歩調を合わせて支援活動を行っている。

慈済基金会の顔博文（イエン・ポーウエン）執行長は、ある時の分ち合いの中で、極端な気象現象による災害がますます深刻になるにつれ、地域社会や地方自治体は防災・救援におけるレジリエンスを継続的に向上させ、事前の準備をする必要がある、と真剣に呼びかけた。慈済が近年行っている台湾各地での防災士養成や、「慈悲のテクノロジー」の防災や援助への応用、災害に関する情報の把握などは、ますます重要になっている。

年の瀬に一年を振り返ると共に、新年を展望するにあたり、現在の世界情勢と見通しは楽観的とは言えない。法師の香港ボランティアたちへの開示が、今も私の耳に残っている。「突然の災害は予測不能です。幸せを大切にして、互いに祝福しましょう」。二〇二六年は世界が平和であるよう、心から祈ろう。（慈済月刊七一〇期より）

# 香港の大火災 アジア各地の洪水被害

香港の大埔地区にあるマンション群「宏福苑」を襲った火災は、最も深刻なレベルの災害になり、世界に衝撃を与えた。また一方では、アジア各国で水害が相次いだ。タイ南部では百年に一度とされる記録的な豪雨が降り、マラッカ海峡では異例のサイクロン「セニャール」が季節風を増幅させ、インドネシアで百万世帯が被災した。さらに、サイクロン「ディトワ」がスリランカに上陸して猛威を振るった。

## 香港 大規模火災

- ▶ 状況 | 11月26日午後3時ごろに出火し、午後6時過ぎには最も深刻なレベル5級火災にまで拡大。
- ▶ 死者 | 161人
- ▶ 住宅被害 | 高層マンション7棟、1,900戸以上。
- ▶ 慈済の支援活動 | 1,800世帯以上に慰問金を配付。慈済大愛中医クリニックで施療を実施。

## タイ 南部の水害

- ▶ 状況 | 11月26日以降、南部で豪雨が続き、深刻な水害が発生。
- ▶ 死者 | 181人
- ▶ 被害 | 南部10県、300万人以上が影響を受けた。
- ▶ 慈済の支援活動 | 医薬品、生活用品および清掃用品を3,000世帯に配付。

## スリランカ 洪水被害

- ▶ 状況 | モンスーン期の雨と11月27日の熱帯性サイクロン「ディトワ」の上陸が重なり、2004年のインド洋大津波以来の最も深刻な洪水被害となった。
- ▶ 死者 | 643人
- ▶ 被害 | 10万戸以上の家屋が損壊、170万人が影響を受けた。
- ▶ 慈済の支援活動 | 温かい食事と生活物資の提供、清掃支援。

## インドネシア スマトラ島の洪水

- ▶ 状況 | 極端な豪雨に加え、熱帯性サイクロン「セニャール」が11月26日に上陸し、スマトラ島北部の3つの州で洪水と土砂災害が発生し、壊滅的被害をもたらした。
- ▶ 人的被害 | 死者1,090人、行方不明者186人、負傷者7,000人
- ▶ 影響 | 330万人、51万人以上が避難。
- ▶ 慈済の支援活動 | 共同厨房と避難所の設置、温かい食事と物資の提供、施療、恒久住宅の建設支援。



# 香港 高層マンション群火災 長い夜に捧げる祈り

鼻を突く刺激臭と天を衝く炎が住民の心を打ち砕き、消防士の家族に不安を与えた。夜の闇の中で見守る慈済ボランティアは、必ずケアと支援を届けると誓った。

整理・編集部 訳・御山凜

十一月二十六日午後、香港・大埔区にある高層マンション群「宏福苑」の一棟から火災が発生した。火の手は外壁補修工事のための足場を伝って上方へ広がり、強い季節風に煽られて周囲の六

棟へ延焼した。発生から三時間のうちに、小規模な火災は最も深刻なレベル5に分類される火災へと拡大した。

暗闇の中、高層階は激しく燃える炎に包まれ、地上では無数の人々が最も焦燥

感に駆られた一夜を過ごした。住民の余さんは、住居の扉や窓を固く閉め切っていたため、火災警報の音にまったく気づかなかったそうだ。妻からの電話で避難を知らされ、携帯電話と身分証明書、財布、鍵だけを手に、逃げるのが精一杯だった。一九五一年、余さんが生まれた年にも香港九龍の東頭村で大規模火災が発生し、数千戸を焼き尽くして一万人余りが家を失った。香港史上最も大きな災害である。あれから七十四年後、彼は再び、壊滅的な大火災に遭遇したのだ。火の勢いが激しさを増す中、フラワーアレンジメントが得意な劉松蓮（リュウ・

ソンリエン）さんは、たまたま大埔近くへ花の材料を仕入れに行っていた。彼女は住民ではなかったが、気が気でなかった。というのも、息子が二人とも消防士で、長男はすでに火災現場に入っていたからだ。「規定では兄弟が同じ区域で任務に就くことはできません。長男の担当区域は九龍でしたが、すぐに新界・大埔へ応援に回され、次男と同じ区域になったのです。それだけ被害が深刻だったということですから。家族のグループチャットがあるのですが、明け方まで無事だという連絡が来ませんでした……」。

火災現場は封鎖線が張られ、多くの避



難所や病院では被災者への綿密なケアが行われた。被災地近くに住んでいる慈済のボランティアたちは、現場に近づけるかどうかも分からなかったが、ただ一つ、関心を寄せなければならぬことだけは分かっていった。警戒区域の外で待機し、支援できるあらゆる可能性に備えた。「中

に入れなくても構いません。住民に必要な断続的に濃い煙が立ち上っていた。この火災は43時間後に完全に鎮火し、2千人以上の消防士が投入された。(撮影・牟婁瑩)

とあれば、いつでも居ますから」。それがボランティアたちの最初の思いであり、

その後二週間にわたって眠る間も惜しんで続けられた支援活動の原点となった。

## 大樹の下から二つの机まで

宏福苑は築四十二年のマンション群で、三十一階建ての建物八棟から成り、総戸数は千九百八十四戸である。最近、外壁の補修工事が行われていて、施工用の足場が燃え出すと、保護ネットは延焼防止機能を果たすことができなかった。更に、ガラス扉や窓を保護するために覆っていた発泡スチロールはもつと可燃性が高く、窓ガラスが割れて炎が室内へ

と燃え広がった。火災は翌朝になっても完全には鎮火せず、八棟のうち宏志閣のみが、風向や距離の関係で、そして消防隊による放水活動によって被害を免れた。

て提供した。

慈済香港支部執行長の施頌鈴（スー・ソンリン）さんはボランティアチームを緊急召集した。災害発生から二十四時間以内に慰問金の配付を決定したが、関係当局からの具体的な回答はまだ得られなかった。「避難所への立ち入りは許可が出ていませんが、被災者登録用の書類を準備し、飲料水や乾パンを持って、警戒区域の外で被災者の安否を気遣いました」。

宏福苑前の公園では、人々が花束を手にと静かな面持ちで園内を巡り、手向けて心から追悼の意を表した。一方で、行方不明となった家族を捜すため、必死に

十二月二十日時点の集計では、この火災による死者は百六十一人に上り、香港政府は、犠牲者一人につき遺族へ二十万香港ドル（約四百万円）の慰問金を給付した。また、被災世帯に、取り急ぎ一戸あたり一万香港ドル（約二十万円）の緊急支援金を、その後、十万香港ドル（約二百万円）の生活補助金を追加で給付した。さらに香港政府は、千戸余りの住宅を確保し、被災者の一時的な住まいとし

搜索チラシを配る住民の姿もあった。

ベテランボランティアの黄錦秀（フワン・ジンシュウ）さんは、「私たちは一律、慈済の制服を着て、避難所から出て来た被災者を見かけると声をかけ、夜になると冷え込むので、毛布やマフラーを用意して配りました」と言った。或る買い物から帰宅した直後に火災に遭った被災者は、二日経っても、身に着けているのは、逃げた時に着ていた薄手の上着のみだった。

「彼らから被災した経緯を聞き、苦しみの深さと命の無常を痛感しました。厳しい状況にありながらも、彼らは生き延



人々は花束を抱え、静かに敬虔な面持ちで秩序正しく宏福苑前の公園を巡り、手向けて追悼の意を表した。(上・盧志德撮影 左・周清蘭撮影)



びたことに感謝していました。私たちはその苦しみに耳を傾け、抱きしめたいと思いました。そして、もっと多くのことをすべきだと感じました」。十一月二十八日、香港政府が被災者カードの発行を開始したことを受け、「これ以上待つことはせず、被災者カードに基づいて慰問金の申請登録を始めることを決めました」。

十一月二十九日、ボランティアは慈濟の支援内容を公表した。その内容は、「十二月六日と七日に九龍塘にある慈濟



ボランティアは11月27日午前、再び宏福苑周辺を訪れ、影響を受けた住民を見舞った。(撮影・牟晏瑩)

香港支部において、犠牲者家族には一世帯あたり二万香港ドル（約四十万円）、被災世帯には一世帯あたり五千香港ドル（約十万円）を贈呈すること。また、油麻地・彌敦道にある慈済大愛中医クリニックで、同日から十二月三十一日まで、被災者および最前線で救助に当たった人

員に対し、無料で診療を行っている」等々である。  
香港政府は、火災現場に最も近い馮梁結記念中学校の校舎を借り、避難者の受け入れや被災者カードの申請、各種給付の続きを行った。出入りは被災者のみに限られ、ボランティアは校舎の外の木



の下に立って、見舞金の受け取りを希望する被災者の登録を受け付けていた。それを見た一人の男性が近づいてきて、「これでは皆さんが大変でしょう」と声をかけてくれた。彼はボランティアを校舎の二階に案内し、受付用に机を二つ用意してくれ、政府のケアチームのボランティアも、被災者を案内して記入を手伝ってくれた。黄さんは、「その後、被災者が次々と訪れ、机も二つから三つ、四つに増やし、支援の動線がようやく円滑に回り始めました」と語った。

チームは屋内外で同時に受付作業を進めた。中には情報の記入をためらう被災

者もいたが、ボランティアは慈済の委員証を示しながら丁寧に説明し、少しずつ信頼関係を築いていった。その後、被災者が自主的に隣人に声をかけ、被災登録をするよう知らせる場面もあった。

助けを求め電話は  
一本も取りこぼさない

「慈済の支援情報が主要SNSプラッ

ボランティアは慰問金配付リストの作成を進めた。緊急の経済支援にとどまらず、被災者が抱える恐怖や喪失感に寄り添っていきたい。(撮影・姚加偉)



ランボランティアの皆さんはすぐに加わってください、一時間以内に静思堂に集まってください”。

大埔の現場で記録した内容は、すべてコンピューターに入力して整理する必要があったので、若いボランティアたちは仕事を終わるとすぐに静思堂へ戻り、朝から深夜十二時まで作業を続け、それが何日も続いた。被災者リストの作成が終わると、被災者に通知を出したが、七十件のメッセージを送信した時点で、システムは詐欺の疑いがあると検知し、通信は二十四時間遮断されてしまった。配付日が目前に迫る中、ボランティアたちは

トフォームで発信されると、一時間も経たないうちに支部の電話は鳴りやまなくなりました」と、慈濟支部の職員で、慈濟委員でもある馬子愉（マー・ツーユウ）さんが言った。第一線で被災者リストを作成し、内部の事務にも対応していたが、人手が足りなかった。被災者が一刻も早い支援を求めていることを感じると同時に、助けを求める電話を一本も取りこぼしたくないとの思いから、同じく慈濟委員である母親に助けを求めた。「ベテ

ボランティアは、フリックボードで被災者に慈濟の支援内容を分かりやすく伝えた。（撮影・姚加偉）

必死に解決策を探した。やがて一人のマーケティング会社の企業家と連絡が取れ、さらに通信ソフトウェアの専門家ともつながった。面識はなかったが、二人は即座に協力を申し出てくれたお陰で、一日で二千件のメッセージを送信してくれ、費用をすべて負担してくれた。

配付当日、受付担当のボランティアは当初、この業務は比較的単純だと考えていた。ところが、五組のスタッフが交代で持ち場を離れて涙を流すほどの状況となった。梁曉霖（リャン・シャオリン）さんは、「被災者が入って来た時の表情には疲労と不安が現れていて、ご家族は

無事ですかと声をかけると、多くの方がその場で涙を流していました。家を失い、家族を亡くし、ペットも亡くした方もいて、私たちは向き合いながら良いこともつらいことも直接受け止め、そのたびに一緒に涙を流しました。皆さんは複数の慈善団体を回り、亡くなった家族の葬儀や諸手続きに追われていて、気持ちを吐き出す時間などほとんどなく、体調を崩しても病院に行く余裕すらない状況だったそうです。静思堂に来ると、少しゆっくりにすることができたようです。会場では慈済人医会の医師による診療と心のケアも行っていました」と語った。

ボランティアの余嘉進（ユー・ジャージン）さんは専門のソーシャルワーカーである。政府や社会福祉団体はすでに支援体制を立ち上げているものの、被災者数がありにも多いため、各種補助を申請するのに何度も列に並び、書類を記入しなければならず、被災者は心身ともに疲弊している様子を見て取った。

「皆さんはすでに疲れ切っていたので、私たちは、彼らの負担を少しでも減らすことはできないだろうかと考えました」。その後、慈済の第二段階の支援計画では、政府の「一世帯に一人のソーシャルワーカー」制度と連携し、担当ソーシャル

ルワーカーと直接協力することで、被災者が何度も行き来する必要のない支援体制を整えた。

### 生存者の幸運と心の傷

記憶を再びあの最も長かった一夜へと戻そう。慈済委員の劉さんは、ボランティアチームと共に火災現場の外で待機していた。「鼻を突く刺激臭と天を焦がすような炎に、強い衝撃を受けると共に、

ボランティアは被災者の利便性を考えて、多くのNGOが集まった場所に登録受付を設置した。（撮影・呂美慧）



息子のことがとても気がかりでした。ですが、泣いているわけにはいきません。責任を引き受け、慈済人としてやるべきことをやろうと思いました」。

帰路の途中、炎の勢いがさらに激しさを増しているのを目にして、彼女は耐えがたい思いに苛まれた。「家に帰ってからは一晩中眠れませんでした。翌日、次男には用心を怠らないようにと伝えました。彼も火災現場で捜索活動に当たっていたのです。幸い、私は慈済に参加していて、事が起きてからずっと忙しくしていたおかげで、不安な気持ちを祈りに変

えることができました」。

数日後、劉さんの長男が帰ってきました。「息子は、私が心配するから、滅多に仕事のことを話しません。その日、息子は三回火災現場に入ったそうです。それが彼の使命であり、仕事ですから、とても勇敢に立ち向かいました。息子は、『私たちの励ましこそが、何よりの支えだった』と話してくれました」。

高齢の被災者の余さんは、数日後に静思堂を訪れて、慰問金を受け取った。彼はボランティアに、「生き延びることができたのは、本当に奇跡です。幸運だった

と感じる一方で、犠牲になった人たちのことを思うと、悲しくなります」と言った。

被害の影響を受けた千九百世帯のうち、慈済の支援は九割以上に及んだ。これは、香港支部が設立されてから三十二年間で、最大規模の災害支援となった。執行長の施さんは、「現金での支援は、あくまで緊急の措置です。心理的な傷が回復するまでには、まだ長い時間がかかります。縁があつて、彼らに寄り添いながら、この困難な時期を共に乗り越えていきたいと願っています」と語った。

(慈済月刊七二〇期より)

## 慈済による慰問金の贈呈

日付 | 2025年12月6日～19日までの集計

場所 | 慈済香港支部

(宏福苑から車で約30分の距離)

世帯数 | **1,800** 世帯以上

内容 | 被災世帯は1世帯あたり**5,000**香港ドル、犠牲者家族は1世帯あたり**2万**香港ドル





停電によって生活が混乱に陥った。この混乱の中、メダン在住の慈済ボランティア、郭春霞（グオ・チュンシャ）さんの家は、二十八日午前九時にボランティエアの打ち合わせが終わると、そのまま急遽臨時の公共厨房に変わった。「本当に緊急事態でした」と郭さんは当時の状況を

振り返り、緊張した声で言った。「全てのボランティエアが直ちに行動を起こし、食材を仕入れて調理しました」。

災害から4日後も、多くの地域は水に浸かったままだった。慈済ボランティアは北スマトラ州デリ・セルダン県の或るモスクで、食糧が不足していた村人たちに温かい食事と米、飲料水を手渡した。（撮影・朱嘉銘）



慈濟は、三十数カ所で臨時公共厨房を設置し、数千食のお弁当を作り、ボランティアたちが腰まで泥流に浸かりながら、歩いて温かい食べ物や米、ボトル入りの水を届けた。カンピン・バル村では、六十四歳のヌライニさんが、孫を連れてモスクの片隅に身を寄せ合っていた。彼

らはすでに三日間ともに食事をしておらず、近所の人たちが持ち出していたわずかなパンで空腹を満たしていた。ポ

スマトラ島は河川と溪谷の多い山岳島だが、森林伐採により水土保全機能が損なわれ、メダン周辺地域は豪雨による泥流で壊滅的な状態である。(撮影・レオ リアント)



スマトラ島の山岳地帯では、橋や道路が寸断され、バダンの慈済ボランティアは、様々な方法でアカン県など山奥の被災地まで出向き、物資を補給した。(撮影・ビビ・スサンティ)

ランティアが温かいお弁当を差し出した時、ヌライニおばあさんは声を震わせ、「本当にありがとうございます。水も電気も止まり、電線もショートし、あらゆる設備が壊れて、家に帰れないのです…」と気丈に答えた。

ボランティアは、サロン（伝統的な腰布）や衣類、清掃用具などの物資をメダンの市街地と、デリ・セルダン県、タンジュン・ムリアなど周辺地域に届けた。デリ・セルダン県のクルンパン・ケボン村では、慈済の物資輸送隊が到着すると、多くの住民が水に浸かりながら列を作り、リレー方式で物資を運んだ。或る

若い母親は、温かい食事を受け取った時、瞬時に涙があふれた。「食料が尽きてから私たち一家は二日間、何も食べていません。アツラーに感謝します。やっと誰かが助けに来てくれたのです！」と言った。

雨が止んで、水が引くと、被災地の衛生状態が急速に悪化し、避難所では皮膚病、下痢、風邪などが蔓延し始めた。慈済は直ちに医療支援を開始したが、その道のりは容易ではなかった。南タパヌリ

県では、バタン・トルへ続く山道の多くの箇所が土砂崩れで通行止めになり、重機で瓦礫を撤去しないと通行出来ない状態だった。ボランティアは軍隊や警察と協力し、車で列を成して四時間半、泥だらけの山道を揺れながら進み、やっと医薬品や物資を届けることができた。

避難所には三つの村の約六百人の住民が避難していた。避難所の掲示板には、五十六戸の家屋が全壊したと書かれており、悲しいことに、依然として多くの人が行方不明になっていた。

慈済人医会のハリ・ケスマア医師は、高齢者を診察し、下痢や皮膚のかゆみを

し、当地の月間平均降水量をはるかに上回り、さらに長年の人為的な開発が洪水と土砂災害のリスクを一層高めていた。

インドネシア最大の環境NGOであるWALHIは、二〇一六年から二〇二五年の間に、スマトラ島北部で約百四十万ヘクタールの森林が伐採され、農園や鉱物採掘のために開発されたというデータを示した。森林という天然のスポンジ層を失ったことで、雨水は土壌に吸収されにくくなり、むき出しの地表を一気に流れ落ち、破壊力の強い土石流を引き起こすのである。このことも、極端な豪雨が降ると、多くの村が急速に土石流にのみ

抑える薬を処方した。「彼らは家を失い、食料と医薬品を切実に必要としています。被害はとても深刻で、彼らの負担を少しでも軽減してくれていることに大変感謝しています」。

### 荷物の運搬にジップライントと小型ボートを活用

人々は、泥濘の中でもがきながら生き延びようとする一方、災害の後の厳しい現実にも向き合わざるを得なかった。サイクロン・セニヤールによる豪雨は、わずか三日の間に数百ミリの降雨量を記録

込まれ、道路や通信設備も破壊される理由を説明している。

北タパヌリ県と中タパヌリ県、及びシボルガ市では、複数の地域で道路が通行止めとなり、世界から隔離された「陸の孤島」の様子を呈した。これらのアクセスが困難な甚大被災地では、陸上輸送が機能しなくなったので、慈済は軍と協力して、四千枚のタオル、衣類、ビニールマット及び数百箱の即席麺とミネラルウォーターを梱包し、ヘリコプターで空中投下して被災者に届けた。

アチェ州ビルン県のクタブラン町では、増水した溪流によって橋が流され、



ボランテアは被災地で生活物資を手渡した(下図)一方、現地では風邪や皮膚病などの感染症が発生し、人医会の医師らは治療を行って薬を処方した(上図)。(撮影・李秀美)

対岸の住民は、避難した時から持っていた食糧が底をつき、逃げる時に着ていた服が濡れで残っているだけだった。ボランテアと救援隊員はジップラインを設置し、食糧と物資を一箱ずつ滑空させながら、対岸で焦りながら待つ人々の手元へ届けた。

アチェ特別自治州では、数十万人の住民が避難所での生活を余儀なくされ、清



潔な飲料水や食糧が不足していた。ピデイ・ジャヤ県は州都バンダ・アチェ市から約二百二十キロ離れているが、洪水が大量の泥と倒木を巻き込んで民家を襲い、二十人が犠牲になった。物資配付拠点の一つであるコット・ガドン村のモスクは避難民であふれていた。夜は寒く、蚊が大量発生していたので、人々は直ちにボランテアが届けた毛布や衣類で寒

さを凌いだ。

更に山奥にあるクアラ・シンパンでは、状況がより深刻だった。食糧が完全に底をつき、清潔な水もなく、住民はSNSを通じて外部に助けを求めるしかなかった。メダンのボランティアたちは、なんとかして緊急援助ができないかと知恵を絞り、陸路を通じないならと水路を選んだ。十二月三日、ボランティアの楊樹清（ヤン・シューチン）さんらがチームを編成し、メダンから車でパンカラン・スス港へ向かい、大型の船に乗り換え、さらに浅瀬まで入れる小舟に乗り継いで、ついに何日も孤立無援だった住民のもと

へ、満載した物資を届けることができた。

### 午前四時に物資を届けた

メダン市とテビン・ティンギ市、パダン市、バンダ・アチェ市のボランティアたちは支援活動を続け、避難所と公共厨房、清潔な飲料水を提供する給水タンクの設置を支援した。十二月中旬になっても、被災地の光景はなお衝撃的だった。アチェ・タミアン県のカラン・バル町では、洪水が引いた後の痕跡が、まるでシュルレアリズムの絵画を思わせる様子を描いていた。流された車が塀に引っか

かり、道路は数十センチの泥に覆われ、スキッドステアローダーやブルドーザーが轟音を立てて撤去作業を行っていた。多くの避難所では、水がないため体を洗えず、人々の体にはいまだ泥の跡が残っていた。

先の見えない状況にあっても、人々の間に秩序と助け合いが形成されつつある様子が見られた。支援に参加したボランティアの中には、自身も被災した人が少なくなく、家族の無事を確かめると、自分よりも一層困難な状況にある人々を優先し、奉仕して助けることを選んだ。

パダン市の慈済人は、車で往復二十三

時間かけて十二月四日午前四時三十分にあガム県パレンバヤン郡に到着し、山奥に位置するため通信が困難で救援資源が不足していたこの村に、物資を届けた。

住民は自分たちで共同厨房を設置した。また、一世帯ずつ七千インドネシアルピアを拠出し、地域の清掃と道路の復旧作業をする住民に毎日報酬を支給した。食糧と赤ちゃん用おむつ、燃料、衣類に加え、慈済が持ち込んだ発電機は、現地の電力が正常に回復するまで共同厨房で使われる予定である。

災害によって生まれた助け合いと回復力は、インドネシアのこの地で今も維持



## 慈済の援助活動の統計

(2025年12月22日現在)

**重点被災地** | アチェ特別自治州、  
北スマトラ州、  
西スマトラ州

**支援範囲** | 13の県と市。  
79カ所の配付場所

**受領者数** | 延べ**47,845**人

**物資の配付内容** |

- 炊き出し：**20,061**食
- 白米：**69.9**トン
- 卵：**12,100**個
- パン：**40,065**個
- 飲料水：**5,046**箱
- サロン（腰布）：**25,963**枚
- 毛布：**14,647**枚
- 医療用原料：**204**箱
- 清掃用具：**5,208**セット
- その他：衣類、タオル、洗面用具、即席麺、粉ミルク、マスク、蚊帳、発電機など

**恒久住宅建設支援** | **2,500**戸。

北スマトラ州で**648**戸がすでに着工

連日の寄り添い支援で、ボランティアと被災者は互いに感謝し合った。すべての物資は愛のリレーなのである。  
(写真提供・慈済インドネシア支部)

されている。被災地の交通はまだ復旧しておらず、道路には泥が残っており、清掃が待たれるが、緊急援助が一段落したので、慈済は橋の修復を支援すると共に、政府と協力して安全で住みやすい恒久住宅の建設にも取り組んでいる。災害後復興への道のりはまだ遠いが、島であっても孤立しているわけではない。慈済は、家を再建したいという被災者に寄り添い、支え続けていく。  
(慈済月刊七一〇期より)

# タイ南部の洪水被害

## 緊急支援！

# 物資搬送車が千里を駆ける

洪水で一階が水没し、屋根に上って救助を待った一家。

激流を越えて、徒歩で学校に避難した九十歳のお年寄り。

慈済はタイ南部で水害に見舞われた地域を支援するため、

三千人分の支援物資を六輪トラックに積み、

千キロの道のりを横断して、葉や水が不足していたチャナ県へと急いだ。

文・桑瑞蓮、蘇品緹、黃徳心（慈済タイ支部職員） 撮影・蘇品緹 訳・惟明

## 夕

イ南部は毎年十一月、北東の季節風の影響で十分過ぎるほどの雨が降るが、二〇二五年はサイクロン・セニャールの影響で、ソンクラー県を含む十の県で猛烈な豪雨となり、百八十人余りが亡くなり、三百万人余りが影響を受けた。

ソンクラー県最大の都市ハジャイ市では、三百年間の日降水量（にちこうすいりょう）のうちで過去最高を記録した。道路や住宅が冠水し、住民は荷物を抱えて屋根に上り、手を振って救助を待った。ある住民は、「二〇〇〇年と二〇一三年には洪水で一階まで水に浸かりました。が、今回のように建物全体が完全に水没したのは初めてです」と、その時の恐怖

が忘れられない様子だった。

メディアはハジャイ郡ばかり報道していたが、隣接するチャナ郡も同様に苦難に直面していた。チャナ郡の副郡長は十二月一日、慈済の現地調査チームと面会した時、十一月二十六日に災害が発生してから、物資はハジャイ郡に集中し、チャナ郡にはまだ支援組織が入っていないことを率直に明かした。

沿岸部のサコム郷やバンナ郷の被害が最も大きく、洪水は三階にまで達した。給水システムの損壊で、日常生活に支障が出たため、住民は泥水で鍋や食器を洗っていた。その上流には農場があり、溺死した水牛の群れの死骸によって水源が汚



染され、伝染病の発生も懸念されている。県政府は、地域全体で給水車が極度に不足しており、予算があっても短期間に水の問題を解決できないことを打ち明けた。慈済タイ支部は、資源の乏しいジャナ郡に支援の重点を置いた。ボランティアたちは、解熱剤、抗炎症薬、風邪薬などの医薬品、及び生活用品と清掃用品の調達に奔走した。十二月一日と二日には、バンコクの静思堂で三千人分の物資を

梱包し、それを載せて、六輪トラックが千キロの陸路を十五時間かけて走破し、やっとジャナ郡に到着した。

タイ支部の張恵珍（チャン・フェイジン）副執行長が先頭に立ち、ボランティアたちが現地の調査を行い、県政府

12月1日、被害調査チームは甚大被災地の一つであるチャナ郡バンナ郷を訪れた。一部の住宅ではまだ水が引いておらず、住民はボートで出入りしていた。



村長の案内で、タイ支部の張惠珍副執行長（左2）一行が被災世帯を訪問し、今のニーズを聞き取った。

と協議した。また、マレーシアのペナンやケダのボランティアも支援に駆けつけ、タイ南部台湾人企業家懇親会と協力して十二月三日と四日に、サコム郷の二千六百世帯とバンナ郷の四百世帯に支援物資を配付した。

サコム郷在住の九十歳の女性は、洪水が猛烈な勢いで押し寄せた時、ロープを

掴みながら胸の高さになった水の中を移動して、学校に避難したそうだ。当時を思い出し、彼女は胸を押さえながら泣き続けた。「とても怖かった……あんな洪水は初めてです！」ボランティアは彼女が微熱を出していることに気づき、幸いにも薬がタイミングよく届けられた。

災害後はきれいな水が不足するが、若

い世代が協力してその困難を解決した。スパボンさんと従兄弟のアフナンさんは、八日間毎日車に大きなポリタンクを載せて村役場まで水を汲みに行き、村に戻って各家庭に配って回った。スパボンさんは、「自分の家も水が必要ですが、他の家も必要ですから、アフナンさん一人に苦勞をかけたくないのです。疲れているかと聞かれれば、確かに疲れています。心から望んでやっています」と言った。慈濟は、被災地の給水と送電が復旧するまで、生活用品や食料の配付を続ける予定である。

(慈濟月刊七一〇期より)

## 慈濟の支援物資配付統計

期間 | 2025年12月3日～4日

場所 | ソンクラー県チャナ郡サコム郷、  
バンナ郷

受領世帯 | 3,000世帯

支援物資内容 |

• 医薬品：

鎮痛薬、抗炎症薬、風邪薬、絆創膏、抗  
菌軟膏、外用消毒薬、消毒用アルコール、  
かゆみ止め軟膏、眼薬、ガーゼセット

• 生活用品：洗濯用洗剤、歯磨き粉と  
歯ブラシ、シャンプー

• 清掃用品：バケツ、ブラシ

12月3日、支援物資が到着した。住民はそれを受け取って家路に着いた。



## ブツダガヤ・職業訓練

## 成功した初めての起業

ボランティアは、住民の生活を改善するための方策として

職業訓練講座を行うことで、起業の支援までできると考えた。

一杯のオレンジジュースや一本の縫い針が、  
貧しい家庭の運命を好転させようとしている。

ス

ジャータ村で「ブツダジュース」

を売る移動販売車では、朝早くに  
オレンジジュース六杯の注文を受けた。

ラルマニさんは客の対応をし、息子のオ

マナンドさんは素早くオレンジの皮をむ

き、娘のナンダネさんはグラスを洗った。

この移動販売車は家族全員の希望の原  
点である。七年前、一家の支えである夫

のビムセンさんが仕事中に感電し、半月  
の間昏睡状態となり、後に意識を取り  
戻したが、体力と記憶力はすぐには回  
復しなかった。ラルマニさんは農作業を  
始めたが、わずかな収入では学校に通う  
三人の子どもの学費を賄うことができな  
かった。

二〇二三年十一月、慈済はケアケース  
の報告を受けて様子を見に来た。その時、  
ビムセンさんが自立した生活をするため  
に、自宅近所の私立病院の前でフレッシュ  
ジュースを販売したがっていることを  
知った。そこで、ボランティアは彼に屋  
台とジュースを提供することにした。

彼の考えに基づいて、頑丈で耐久性があ  
り、移動しやすい屋台を特注した。当初、  
彼は娘さんの名前を店名にしようと考え  
ていたが、二〇二四年一月に完成品を目  
にした時、慈済が無償で助けてくれたこ  
とに感動し、「慈済は佛教の団体だから、  
屋台の名前は『ブツダ』に決めました」。

一年以上が経過し、ビムセンさんは心  
身共に徐々に回復し、新しい仕事を見つ  
けた。屋台の経営はラルマニさんに引き  
継いでもらった。彼女は積極的に事業の  
拡大を考えた。例えばビスケットの仕入  
れ販売をして、商売をより多様化しよう  
と考えた。娘さんのナンダネさんは成績



優秀な子供で、まもなく十年生に進学する。彼女は微笑みながら、「以前、母は自転車で畑へ農作業に行き、風雨にさらされ、真夏の暑さの中でも農作業をしていました。今の仕事はとても良いと思います」と言った。

もう一人、移動販売車で成功している店主は、サンジートさんだ。彼は毎朝五時に起床し、オートリクシヤに乗ってガ

今年3月に慈済会所で裁縫上級クラスが開催され、学生の制服を縫い上げた5人の受講生が慈済から奨励金を受け取った。(撮影・胡媛甄)

ヤの青果卸売市場へ行き、パイナップルとパイヤを仕入れている。九時に仕込みを行い、十時から正午十二時まで、マハーボディ・コンベンションセンターの前でカットフルーツを販売している。午後からは屋台を押ししてマハーボディ寺院へ向かい、移動販売に切り替える。

フルーツの小皿は十ルピー（約十七円）で、一カ月の収入は一万五千ルピー（約二万五千元）になり、サンジートさんは、果物の倉庫として小さなタン小屋を建てることさえできるようになった。娘さんも生活のリズムを変え、朝三時過ぎに起きて彼の朝食を準備している。彼は

## 職業技術訓練、無上の喜び

慈済は二〇二二年にブツダガヤでNGOの登録を完了し、翌年九月に会所を開設した。慈善支援に加え、「職業訓練」や「就業指導」を行うことで、ケア世帯と貧困家庭に対し、生計を立てる力を身につけるための方策を支援している。

ブツダガヤでは職業を持つ女性は少ない。農村でよく見られる光景は、女性たちが集まっておしゃべりをしたり、砂で鍋をこすったり、家族のシラミを取ったりする姿だ。たとえ働きに出られても、肉體労働が中心である。慈済会所では、

「娘が作った朝食を食べると、とても幸せな気持ちになります」と言った。

今年五月から、この幸せな二人のオーナーは「愛に満ちた商店」プロジェクトに参加し、屋台に竹筒募金箱を置いて顧客に善意の寄付を呼びかけている。慈済ボランティアは定期的に集金し、より多くの人を助けるために活用している。かつて失業していたサンジートさんは、今では一家七人を養えるようになった。彼は両手を合わせて、お金を募金箱に入れ、好感の持てる笑顔をして「本当に感謝しています。私はとても幸福な人間です」と言った。

中国語クラス、裁縫クラス、コンピュータークラス、英語クラスが開設されており、女性を中心とした裁縫クラスはすでに第四期の募集に入っていた。また、慈済が支援建設した大愛住宅のあるシロンガ村には、編み物クラスも設けられている。

大愛住宅の住民コシラさんは、初めは棒針を全く使えなかったが、今では毛糸の帽子を慣れた手つきで編めるようになった。彼女は技術を身につけただけでなく、収入にもなっているので、この達成感が大好きだそうだ。

慈済ボランティアは帽子の品質と数量



慈濟の第一期裁縫クラス修了生、サラスワティさん（中央）はサリーの店を開いた。ボランティアの林玉金さん（右）と凌翠蓮さん（左）が、インド女性の代表的衣装をまとった。（撮影・李美慧）

に応じて給与を支払っている。寒い冬が訪れると、完成品を買い取って、学校の子どもたちに贈っている。教師のレカさんは大変喜んで、「慈濟が給料を支払う日には、全ての生徒が私に感謝してくれます。そして私は、生徒一人ひとりの努力に進歩を見出すのです」と言った。

マレーシアのボランティア、郭糧鳴（グオ・リヤンミン）さんは、女性たちに欠席せず、真面目に学ぶよう励ました。「ここで学ぶのに費用は一切かかりません。慈濟人が毎日お金を貯め、寄付金で先生を雇っているのです。学んだことは他人に教えることもできます。他人の

助けを待つことなく、あなた方も人助けができるのです」。

五月中旬、ボランティアはスジャータ村に行つて、第四期初級裁縫クラスの講を宣伝し、村人の申し込みを受け付けると同時に、「欠席が三回を超えた場合、再びクラスに参加することはできない」という約束を提示し、マレーシアのボランティア、林玉金（リン・ユウジン）さんがそのことを丁寧に説明した。

女性たちは一列に並び、壁にもたれかかり、腕を組んだりしていた。最初はやる気満々だったが、「三回以上欠席できない」と聞いて尻込みした。

最初に募集に応じたのは十八歳のスウィーティさんで、彼女は素敵な笑顔と真剣な態度の持ち主である。彼女の父親は「酒の代わりにお茶にした」成功事例の一人であり、すでに七カ月以上、お酒を飲んでいない。今はマハーボディ寺院近くでサトウキビジュースを販売している。

## 店を持つ夢、社会への恩返し

今年の五月二十日、林玉金（リン・ユージン）さんは慈済会所の近くにある一軒の店を訪ねた。広々として明るい店内に入ると、優雅で自信に満ちたサラスワ

ティさんが出迎えてくれた。彼女は慈済の第一期裁縫クラスの修了生であり、二〇二三年に訓練を受けた際は、上達が早いうえに、同級生のミシンの糸絡み問題を解決する手助けまでできたのだった。

その時、彼女は慈済会所で、證嚴法師の「行動しながら学び、学びながら悟り、悟りながら行う」という法語を読んだ。そして心に「いつか自分の店を持つ」と誓った。二〇二四年十月十日に、その夢が現実となった。彼女は色鮮やかで華やかさと高貴さを備えた、インドの女性が着る伝統的民族衣装「サリー」を仕入れ販売している。店内の商品は整然と陳列

され、ミシンが一台置かれており、顧客のサイズ直しを無料で行っている。

彼女は「最初は何もできませんでしたが、慈済の先生から知識と技術を学び、服やバッグ、制服を作れるようになりました。自分が多くのことをできることに気づいたので、もっと成長し続けられると思います」と言った。以前は自分に人助けができると思えたことはなかったが、今ではそれが分かった。自ら進んで手を差し伸べたいと思っている。

店を開いて収入を得られるようになった彼女は、夫のラセデオさんと共に真面目に貯金し、店舗裏の土地に教室を建

てて、女性たちに裁縫を教え、学んだ技術を伝え、社会に恩返ししようと思っている。

妻の変化について、ラセデオさんはこう語った。「以前、彼女はとても怒りっぽく、私たちはよく喧嘩をしていました。私もどう対応すればよいか分かりませんでした。しかし、慈済の裁縫クラスに参加してから、彼女は少しずつ変わり、穏やかに話し合い、一緒に相談して物事をより良くするようになりました」。彼は照れながら「私はよい妻を持っています。だから私はとても幸せです」と告白した。（慈済月刊七〇七期より）

## 世の平安は人生最大の幸せ

新年の心願は自分の幸福だけでなく、

良い心がけて良い願を立てるよう人々を導きたいと願っています。

常に良い事を話し、良い事を行い、衆生と共に幸福を造りましょう。

人々が仲良くなり、世の中が平和になり、

自然の営みが順調であることは、人生で最も大きな幸せなのです。

### 西

暦の正月が過ぎると、次は旧暦の春節を迎えます。毎年この頃は、歳末祝福会が催されて喜びに満

ちると共に、また時の過ぎ去る早さを感じさせられます。「一日過ぎれば、命もまた短くなる」。日々が過ぎ、毎日平

穩無事であることが幸せというものです。敬虔に自分の幸せを祈るだけでなく、大いなる因縁によって、慈濟という団体の中で天下の衆生に福利をもたらせれば、もつと幸せなのです。

私たちは模範にならなければなりません。常に良い事を話し、良い事をし、人々の善良な心を啓発し、良い願を立てるようになれば、共に世の中で幸福を造ることになります。同じ善念を持って人々が仲良くなり、自然の営みが順調になれば、これこそが私たちの人生での最大の幸せなのです。

仏陀がこの世にきた最大の目的とは、人々に菩薩法を説き、人々が菩薩心を啓発して苦難にある人々に奉仕することを教えるためです。人には元より仏性が備わっていますが、ただ何世にもわたって何重もの無明に覆われ、自分の清浄な本性が覆い被さってしまったのです。心にある仏性を見つけ出すことが、私たちの修行の目標なのです。

一念の無明から道理を逸れ、僅かな誤差が万里の差になるため、私たちは心のあり様をしつかり守らねばならないのです。もし、人の言葉や態度が自

分を傷つけ、それによって心に無明が起きたら、仏法を以て綺麗に拭いきり、無明・煩惱を転じて智慧と成し、人と良縁を結ぶのです。

歳末祝福会のどの会場に行っても、朝から慈済人が私に会いに来ます。人々の分かち合う人生は、まるで一部一部の經典のようで、私の知識と智慧を増やしてくれます。私も皆さんが人間（じんかん）で奉仕している時に、皆が心一つに、仲良く行っているのかどうかを聞いてみたいのです。活動の中でお互いの意見が合わず、不愉快な気

分の持ち場で精進し、「合心、和気、互愛、協力」という四つの心得を普段から行っていることに、私はとても満足しています。

私はいつも慈済人に対し、自分の人生の価値を点検するようにと話しています。私も毎日点検して、幸せを感じています。生々世々善因と良縁を積み重ね、今生は仏教に奉仕しています。そして、これほどたくさん人間（じんかん）菩薩が私を支持し、世間でたくさん苦難にある人を助けてくれます。皆さんの地域での訪問ケアのお

持ちになつていたら、私に話してください。私が皆さんの心を調整して、同じ方向になるよう導いてあげます。二本のレールが正確に敷かれていれば、列車がどれだけの車両を繋げても、一つの車両が次の車両を引っ張って前進し、その道理は揺るぎないものです。世の菩薩道とはこういうことです。

私は毎日、私たちの世代が共に慈済に参加し、価値のある事に奉仕し、毎日、良い人たちと集い、心が喜びに満ちていることに感謝しています。皆さんが服装を整え、秩序正しく出入りし、自

話で、ケア世帯の子供が大人になって自立した話や、慈済人一家全員が慈済に投入し、子や孫の代の人が私に分かち合ってくれる話を聞くと、彼らのご家庭の仲睦まじさを感じられます。これらは私にとって、とても大きな供養であり、それだからこそ、私もまた大衆の中で修行をしているのです。

慈済人が大衆と良縁を結び、人に与える印象と行動を見た人たちは、これが「慈済」なのだ、と愛と尊重の思いを抱き、慈済人の品格と礼節を肯定してくれます。ですから、私たちは更に

自分を点検し、慈済の志業に参加することの価値と責務を理解し、自愛しなければなりません。もしお互いの間で、不当な行為を見たり、不適切な言動をしたり、声を荒げたりするようなことがあれば、そつと近寄って気づかせてあげましょう。それは、お互いのためになる愛なのです。

毎回の行脚で、皆さんを見るたびに、老いの早さを感じます。歳月と共に過ぎていけば、自然の法則から逃れることはできません。病氣と老いは辛いものですが、皆さんの人生の様々な経験

を私も感じることができ、老いてこそ、その意味が分かるのです。

慈済人がケアしている家庭や身寄りのないお年寄り、病に苦しんでいる人たちは、誰かの助けが必要です。慈済人に住環境を清掃してもらったり、エコ福祉用具を届けてもらったりする時、彼らの心が感謝に満たされるのは想像に難くありません。愛されることはとても幸せですが、誰も世話をやかれたいとは思わないものです。ですから、愛の奉仕をする人は細心の注意が必要で、相手の心を傷つけないようにし

なければなりません。相手が、「軽く見られた」、「軽蔑された」と感じるようではいけません。人間（じんかん）菩薩が真心で近づいて、相手のために祝福すれば、深い印象を残してくれるでしょう。

春節が近づくこの頃は、萬物に春が訪れ、発展の季節を迎えますが、慈済も皆さんの努力で更に発展していくことを願っています。皆さんの新年の願いが叶い、そして、すべての人々のために祈ることも忘れないようにし、その敬虔さを結集して、愛のエネルギー

を奉仕すれば、世の中は平安と無病息災になるでしょう。これが私たちにとって大いなる 幸せなのです！



（慈済月刊七一一期より）

老後に  
望むこと

# チームが引き継いで 高齢者を敬う

## 全住宅ケアと全人ケアの記録

無償で設置された手すりにしっかりとつかまり、  
足元の障害を取り除いて安心して歩けるようにする。  
一見些細なことのように見えるが、  
実は超高齢社会を迎えた台湾の介護における大きな課題なのである。

台南市の3分の2は交通が不便な場所だ。東山区高原里では、アリの大軍のような慈濟ボランティアのお陰で、「高齢者と古い家」の双方が支えられている。



そ

の日は天気が非常に悪く、台中市北屯区に到着すると、ザーザーと大雨が降っていた。大坑路を進み、新しく建てられた別荘型住宅が並ぶ地区を通り抜け、突然現れた細く曲がりくねった山道を上ると、雑木林の外れに一軒の農家が見えた。八十六歳の徐玉秀（シュ・ユウシユウ）さんが、一番美しいブラウスを着て私たちを出迎えてくれた。彼女は一人で山の竹林を守っているが、タケノコを採り終えたばかりで、草刈りに忙しかった。

山あいにある東山里には、数軒の住民が長年簡素な生活をしながら暮らしている。想像しがたいことだが、二年前は、おばあさんがトイレに行くのに、家の外へ出て、ぬかるんで歩きにくい場所を越えなければならなかった。

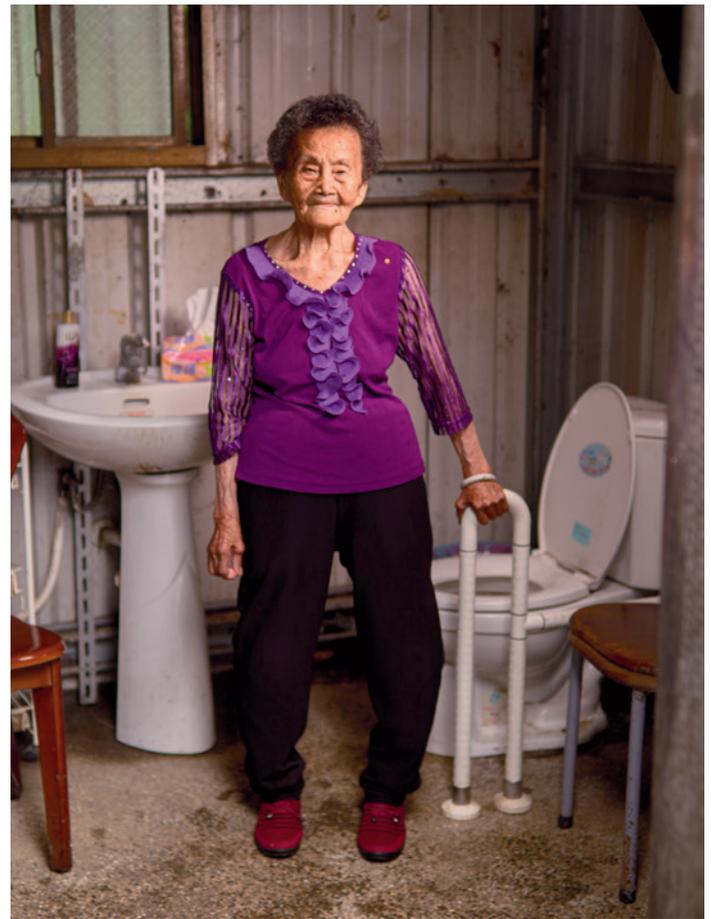
## 古い家とそこに住む高齢者に潜む二重の危機

農業から発展してきた台湾は、二〇二五年、本格的な超高齢社会へ突入

した。国民五人のうち一人が六十五歳以上の高齢者である。都市部を除けば、伝統的な農村部では、何枚かの田や畑を隔てて一軒の家や極めて簡素な農舎が点在している。古い家では、トイレの設計が最も軽視され、階段下の狭い空間に設置されていることが多く、各階に設置されているとは限らない。或いは徐さんの家のように、屋外に設置されている場合もある。夜間でもいつものように外へ出る彼女は、「慣れているから」と言う。すでに五十年間、その家に住み続けているのだった。その年、東山里の里長である邱財源（チュウ・ツアイユエン）さんが

慈濟ボランティアを案内して各家庭を訪問し、現地調査を行った。その結果、徐さんを含む一帯の五、六世帯が、このような郊外の場所で生活をしていることが分かった。「もう長くは生きられないから、どうでもいい」と高齢者は言う。

内政部不動産情報プラットフォームの調査によれば、台湾全土の住宅の築平均年数は三十七年で、高齢者が古い住宅に住むという二重の危機が、益々深刻化している。緊急対策として、各家庭の状況に応じて柔軟に対応し、使用者の事情に合わせて「オーダーメイド」の修繕・補強を行うことで、一人一人のニーズを満



5年前、台中市北屯区東山里には修繕を必要とする古い住宅や農家が数軒あった（左の写真）。5年後、86歳の徐玉秀さんの状況は大きく改善され、今では屋外へ出ることなく、手すりにしっかりつかまってトイレへ行けるようになった（上の写真）。

たすようにしている。

徐さんの家は、窓や扉が壊れ、屋根は雨漏りして室内は暗く、蛇や小動物が隙間から出入りしていた。二〇二〇年、元々金物工場を経営していた蔡明模（ツァイ・ミンモ）さんは、父親の事業が二度も興衰したことで、若くして商売の厳しさを知り、若い頃から成功を志して中国本土へ渡った。周囲にゴルフを楽しむ年上の実業家が集まる中で、彼は気前が良く、豪快で闘志に満ちた存在だった。早くから慈済の慈善活動にも触れていたのですが、その後、病気の父親を看病するために台湾へ戻り、慈済ボランティアの寄り添い

に感銘を受けて以来、国際災害支援活動に何度も参加し、最終的には台湾で地域の慈善活動を推進するようになった。今回、里長の案内で徐さんと出会い、彼女から「必要ない」と修繕を拒否されても諦めず、続けて四〜五回訪問した。お茶を飲みながら会話を重ねて信頼関係を築いた結果、彼女はようやく雨漏りの修理とトイレの改修に同意した。

しかし、トイレを屋内に移すには、まず浄化槽を設置する必要があった。工事の規模が小さいため、ボランティアは手で持てるドリルで地面を掘り、やっと次の室内改善工事へ進むことができた。

## 家から始める支援

「安心して住める家・善きコミュニティ」（略して安美プロジェクト）は、慈済基金会が地域を訪問し、家庭内の小さな環境改善から始め、よりきめ細かく心身のケアへ繋げていくプロジェクトの一環である。小さな思いやりこそが、人々の心に深く響くのである。東山里は、このプロジェクトの模範地域の一つである。

外回りの工事が完了した後、屋内に入ると採光が悪いことがわかり、電気コードも老朽化していて安全面に不安があった。当初は二〜三項目の改善を予定して

いたが、最終的には十項目以上にまで増えた。これらの水道・電気工事は、技術的には難しくないが、やろうと思う人が必要である。慈済は台湾の民間団体の中で、地域ボランティアが最も多いNGOであり、地域密着型の活動に強みを持っている。

徐さんの家でのもう一つの修繕作業は、雨漏り対策だった。築五十年以上の屋根瓦は苔に覆われているため、まず高圧洗浄機で苔を除去し、室内の光を遮っていた木の枝を剪定し、その後、瓦の補修を行って、最後に屋内から雨漏りの修理をする。室内が暗すぎて電気スイッチ



(撮影・蕭耀華)

(撮影・蕭耀華)

徐さんの家の屋根瓦の修繕は容易ではなかった。枝を切り落として苔の除去を終えた後、慎重に足場を組んで新しい瓦を設置することができた。

の位置がわからないままでは、徐さんが床に置かれた雑物につまずいて転倒する危険があったため、ボランテアは物を片付けるだけでなく、いっそのこと壁を白く塗り直すことにした。これにより、工事の範囲がさらに広がった。

工事が完了すると、家は見違えるほど

明るくなり、緊張していた徐さんの表情も和らぎ、笑顔がこぼれた。

変化には大きな勇気が必要である。徐さんの古い家は、過去六十年間、これほど多くの人が一度に訪れたことはなかった。安美プロジェクトの支援を受けるようになってからは、「子どもたち」が頻

繁に彼女を訪ねるようになった。山の麓に住む魏淑美（ウェイ・スウーメイ）さんは、数週間ごとに様子を見に来ている。「お婆ちゃんも、まだ三輪車に乗って大坑のロータリー付近までタケノコを売りに行けるのです。日用品をかうとまた山を上っていくのです」。徐さんが力を込めて、ペダルを漕ぎ、疲れたら自転車を押して急な坂を上る姿が目に見えていた。「以前は道に苔がいっぱい生えていましたが、幸いに前回、全面的に清掃したことで、比較的滑らなくなりました」と蔡さんが言った。今回の訪問では、ボランティアが壊れた台所の木製扉の寸法



トイレを屋内に設置するためには、まず浄化槽を掘らなければならなかった（左の写真）。腐食した木製の扉を、近く新しいものに交換することになっている（上の写真）。（撮影・人文真善美ボランティア）

を計り、新しいものに交換することにした。これで少なくとも、蛇が「隙を突いて侵入する」ことができなくなる。

新北市平溪区も超高齢化が急速に進み、六十五歳以上の人口が三割に達している。二〇二〇年、慈済ボランティアは、衛生福利部の「高齢者に優しい住宅政策」に呼応して安美プロジェクトを始動した。この地域は山に囲まれ、住民は広範囲に分散して暮らしているため、住所の確認が難しかった。当初は、地元で最も活発で人望があり、菁桐駅で長年清掃員として働いたり、伝統音楽「北管」の楽団に所属して媽祖（マーズ）の神輿の巡

行に同行したりしていた詹明珠（ジアン・ミンヅウ）さんに案内をお願いしようと思っていた。安美プロジェクトの修繕支援を受けた李緞（リー・ドウアン）さんのところへ連れて行ってもらおうとしたのだが、僅か数年のうちに詹さんは緑内障を患い、今では外出が全くできなくなってしまうていた。

### 状況と人に応じた柔軟な対応

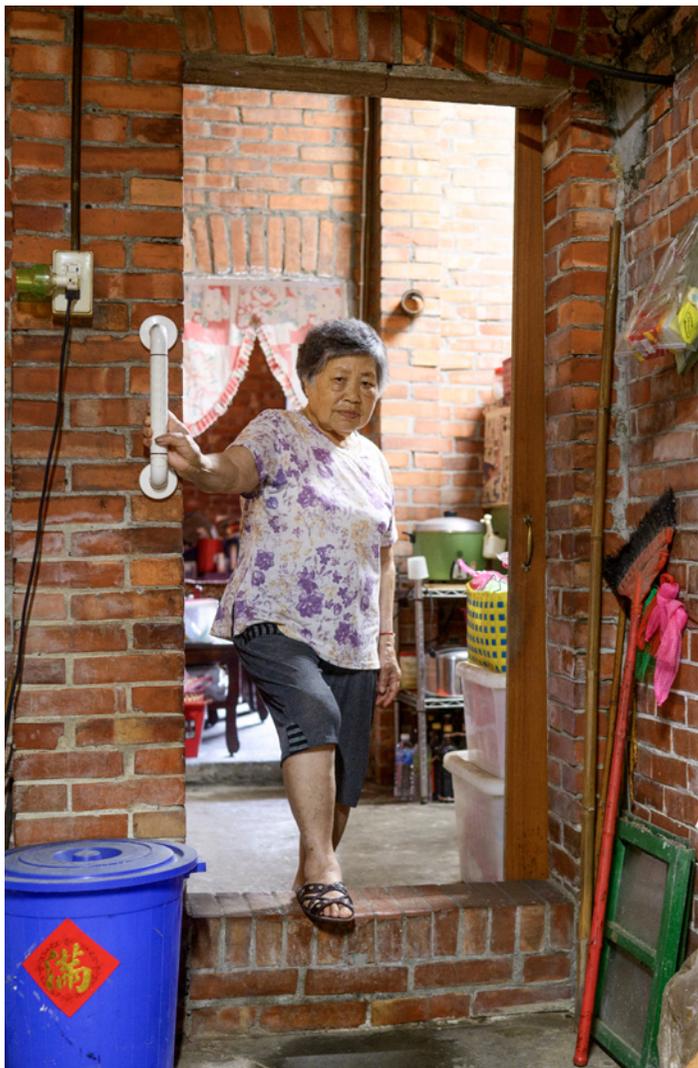
ローカル線が一日に十数本行き来する菁桐駅の傍にある詹さんの家は、今では玄関から奥まで、手すりを設置されてい

る。かつては他人の世話をしていた彼女も、今では外国籍介護者の助けを受けている。ため息をつく彼女の大きく開いた目に光は入らず、瞬きもしないが、涙が浮かんでいた。連日の雨で家の中は湿気がこもり、浴室とトイレはまるで水洗いしたかのように濡れているのが気がかりだった。寝室へ入る所には段差があり、外国籍介護者の支えが必要である。足をぶつけないように簡単にビニール袋を貼ってあるだけだったので、「スロープを設置した方が歩きやすいのでは？」と尋ねると、「慣れているから」と答えた。

徐さんと同様、詹さんもそう言った。か

つて彼女は、三つ年上の李さんを含む複数の近隣住民に、居住環境の改善を説得したことがある。その際も、李さんは「慣れているから」と言い、ボランティアの善意を一度は拒んだ。

詹さんの案内がないのなら、漠然と山道を進むしかなく、家を見つけては尋ねていくうちに、偶然にも、近所でおしゃべりしていた李さんに出会うことができた。彼女の住む築百年の古い家へ行くには、とても急な坂を下りなければならなかった。五年前は、詹さんの案内で古い家を調査し、手すりの設置を勧め、「無料ですよ」と説明したが、李さんは「こ



れも要らない、あれも要らない」と拒否した。「慣れているから」だけでなく、多くの高齢者は出費を心配し、騙されるのではないかと警戒するのだ。「最初は500元と言っても、後で1000元になるかもしれない。世の中に本当に善意で家を修繕してくれる人なんているのだろうか？」と疑うのだ。詹さんが根気よく説得を重ねたので、李さんはようやく首を縦に振った。施工者は、彼女の身長や、トイレから立ち上がる際に手が届く距離を考慮し、レンガの壁に手すりを設置した。彼女の家のトイレも屋外にある。母屋に隣接しているとはいえ、夜間に用

を足すには懐中電灯を持って暗闇の中を歩かなければならなかった。現在八十四歳の李さんは、夜間の排尿のためにベッドの下に便器を置いている。

築百年の古い家には多くの段差があり、リビングから台所へ行くにも大きな高低差がある。すでに足腰の弱っている李さんのために、ボランティアは台所の壁にも手すりを設置した。今では、彼女は先ず手すりをしっかりと握ってから足を踏み出すようにしており、安全性が高

平溪区の李緞お婆さんの家には段差があり、手すりを設置したことで台所への出入りが楽になった。



治療よりも予防が大事です」。これは、高雄の左営に住むボランティア、黄文能（フウオン・ウエンノン）さんが、長年安美プロジェクトを実施してきた中で得た感想である。手すりの設置だけでなく、和式トイレを洋式に取り換え、床のタイルに滑り止めを貼り、跨ぎにくくて滑りやすい浴槽を撤去し、入浴用椅子を提供するなど、小さな工事にも大きな配慮を心がけている。これらはまるで高齢者の老後を支える「手」のようなものであり、地域で安心して老後を過ごすためのポイントなので、軽視してはならない。

まった。浴室の小さな浴槽は滑るのが怖いので使わず、小さな風呂椅子に座ってシャワーを浴びている。洗面台の横にもW字型の手すりを付け、体重を支えることができるようになっていた。これらの工事が終わった時、李さんは直ぐに、いくらかかるのかと尋ねた。「無料ですよ」と詹さんは何度も強調した。

「命を守るために転倒を防ぐのです。高齢者に安全な住環境を提供するには、

かつて支援のきっかけを作った詹明珠さんは、現在は視力を失い、自身も手すりを必要としているが、「要らない、慣れているから」と繰り返し言う。

弘道基金会と統一超商は、二〇一四年に経済的に困難な高齢者のための住宅修繕プロジェクトを発動した。かつて、二階にしか浴室がない家に住む巫（ウー）お婆さんを支援したことがある。彼女は急で狭い階段を登ることができず、共に暮らしていた息子も長年の透析治療で体が弱っていて、母親の入浴を手伝うことができなかった。巫さんは三カ月間つらい時期を過ごした後、やっと住宅リペア職人のお陰で、一階の屋外スペースに簡易浴室を設置してもらうことができ、問題が解決した。これにより、ボランティア

に頼って、お風呂に入るために養護施設まで送ってもらう必要がなくなった。

## 予防型の慈善活動

「まだ必要ない」段階で住環境の小規模改修を行うことは、まさに「予防型の慈善活動」である。問題が発生してから対応するよりも、社会的コストを大幅に削減できるのだ。

転倒は、六十五歳以上の高齢者にとって二番目に多い死亡原因であり、そのうちの四割以上が住環境に起因している。特に浴室での事故が多く、次いで寝室が

続く。防滑施工がされていない、固定された手すりが無い、ベッドのそばに懐中電灯が置かれていないなどの理由で、事故が起こるのである。

台湾がまだ高齢社会に突入する前、多くの人は「老い」の問題について考えたことがないか、「考えたくなかった」はずである。長栄大学看護学部の副教授である陳彩鳳（チェン・ツァイフォン）さんは、近年「高齢者の住環境安全」に関するセミナーに招かれ、各地で講演を行っているが、そこで初めて、人々は気づかされた。地方の村で、日常的に行き来している人の半数以上が高齢者であり、住んで

いる家はほとんどが古い住宅で、玄関前は高い段差が多い。「今日はあの家で転倒事故があり、明日は別の家で転倒が起きる」といった状況である。都会で働いてきた五十代の聴講者は、この問題は若年や中年層には想像もつかないことであることに気づき、瞬時に共感した。「ベッドの手すりはどちら側に設置すべきか？ どうやって設置するのか？」といった質問が相次いだ。それら具体的な疑問に対し、陳さんは一般的な回答しかできなかつた。「使用者の身体状況によりま

す。片側に麻痺があるのか？ ベッドは中央に置かれているのか、壁際なのか？ 高

齢者の起床後の動線はどうなっているのか？ などの状況によるのです」。これは、安美プロジェクトが長年積み重ねてきた経験と一致している。事前に一軒一軒訪問し、現地調査を行い、使用者の生活環境、習慣、身体状況、家族の要望を理解した上で、個別に対応する必要がある。これは一般の施工業者にとっては採算が合わない作業であり、「関心と現実にはギャップがある」と陳さんは言う。だからこそ、民間のNGO団体やボランティアの自発性によって、費用を度外視して心を込めて取り組むことで、理想的な住環境の改善が実現できるのである。

注意深く自分たちの日常生活を振り返ってみると、普段は気にも留めていないところに危険が潜んでいることに気づくかもしれない。例えば、照明が不十分、廊下が長すぎる、トイレに行く時に段差がある、台所が湿っている、玄関が平坦ではない、リビングの家具が通行の妨げになっている、曲がり角に積まれた箱にぶつかったりつまずいたりする可能性がある等だ。手当たり次第に物を持ってきて踏み台にしたり、滑り止めにタオルを敷いたりすることもあるだろうが、有り合わせのものでは雑すぎるのである。

陳さんは、視覚障害を持つ人々にも注

## 平穏な時には危機に備える

当然のことながら、九割以上の家庭の浴室やトイレには、手すりが設置されていない可能性が高い。必要性を感じていないからとか、見た目が良くないからという理由だろうが、「しゃがめない人、しゃがんでも立ち上がれない人はどのくらいいますか？」と問いかけて、「それはすでに手すりが必要だというサインですよ」と陳さんは笑いながら言った。

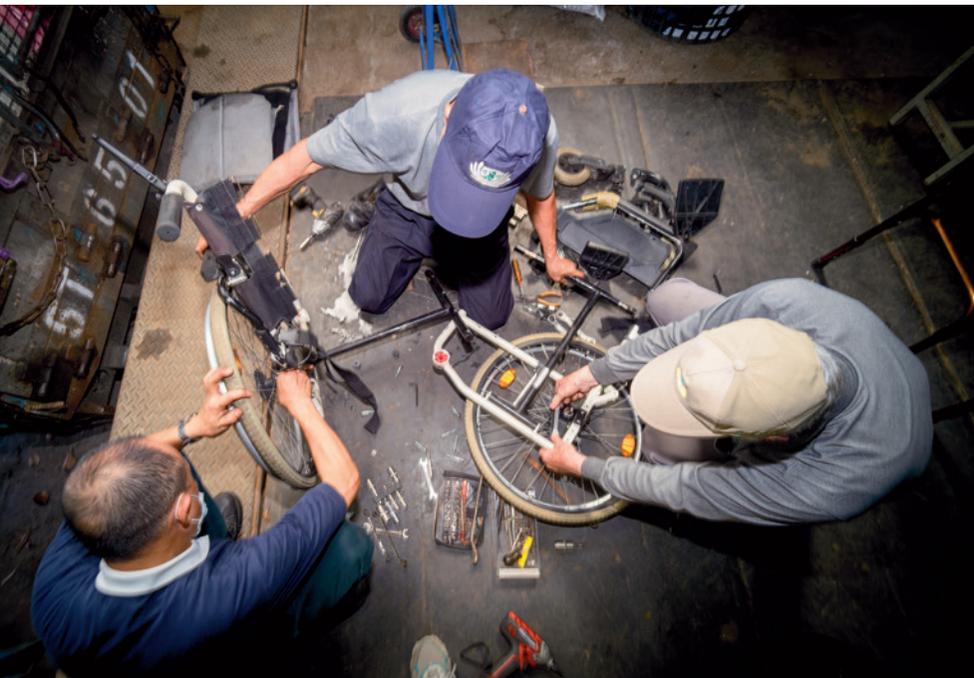
「新幹線のトイレで手すりを見て、なぜこんな変なものをつけるのかと思いました」。

意を促している。「白内障の手術をする前、最も怖いのは、次のような階段です。例えば、各段の色が似通っていて、縁がはっきりしない場合は、見上げると階段全体が平らに見えるものです」。彼女は、夫が両膝を折って、両手をつき、「ゴン」という音と共に頭を床に打ち付けた瞬間を目の当たりにしたという。わずか二、三秒の出来事だったが、本当に恐ろしい体験だった。高齢者が「転倒」するのは一番怖い。一度転ぶと、二度と立ち上がれないことがよくあり、寝たきりとなつて、そのまま人生の終わりを迎えることもある。

「以前は手すりが邪魔で、見た目も悪いと思っていましたが、今はその意味がよく分かりました」。

「今日初めて知りました。高齢者にとって、起き上がるという些細な動作がこんなにも大変だとは。ベッド脇に手すりがあるだけで改善できるのでね」。

「まだその時ではない」と必要性を感じていない人にとっては本当に理解できず、思いつかないことかもしれない。しかし、立場を変えて考えることで、家族や隣人同士を助け合えるようになる。「ベッドの下にある小さなナイトライトは、本当に思いやりのある設計です。祖



母の部屋にも設置したい」とある女子大  
学生が言った。

陳さんは高齢者の家族に対して、「バ  
リアフリー化を大きさに考えすぎてもい  
けないし、軽んじていけない」と助言  
する。少しの設備を追加し、動線を改善  
するだけで、高齢者が生活する上での  
障害を減らし、安全性を高めることがで

新店区屈尺のエコ福祉用具拠点では、中古  
の福祉用具を提供しており、ボランティア  
が修繕技術を熱心に学んでいた(上の写真)。  
使用できなくなつたものは解体され、部品  
として再利用される(左下の写真)。電動  
ベッドは機能をテストした上で配送が可能  
となる(左上の写真)。

きるのである。家庭で高齢者が寝たきりになれば、介護には一対一の人的負担が必要になるのだ。

アメリカ、スウェーデン、アイルランド、日本などの国々では、高齢化に対応するために在宅高齢者向けの住宅改修支援制度が整備されており、補助金が支給される。工事の人件費は無料で、部品や材料費のみを負担すればよい。これらの国は、住宅改修によって高齢者の自立生活を促進し、介護サービスにかかる社会的コストを削減できることを知っている。これは、慈済基金会が提唱する「予防型の慈善」理念と一致している。

ボランティアと称して、募集も積極的に行っている。

新北市新店区屈尺で、慈済は二〇二五年初頭に古いリサイクルステーションを「エコ福祉用具拠点」に改装し、毎日台北市と新北市の慈済ボランティアが忙しく働いている。朝から回収された各種福祉用具を一つひとつ分別し、大型のものは洗浄・消毒・乾燥を行う。「天気にも恵まれないといけません」。別の地区から来た徐建發（シュー・ジェンファ）さんは、細部まで丁寧に洗浄していた。彼は、資源の再利用によって物の命を延ばすことに感謝すると共に、次に使う人に安心

台湾でも長期介護政策の一環として、二十一項目の在宅バリアフリー化に対する補助がある。これらは工事が簡単でありながら、高齢者の安全を守り、老化を遅らせる効果がある。

台湾のエデン基金会は、二〇一七年に「安居修繕グループ」を立ち上げた。その後、台湾社会において、退職者や再就職希望者、セカンドスキルを学びたい人が増えたことに対応し、修繕技術講座を開設した。資格試験はなく、簡単な住宅の左官、木工、塗装、電気・水道工事などを学ぶことができ、高齢者支援にも活用されている。「ドライバー（工具）

と祝福を届けたいと願っている。

基隆で長年福祉用具の修繕をしてきた呉文讚（ウー・ウエンヅァン）さんも支援に駆けつけ、小さなネジ一本に至るまで、他のボランティアに手取り足取り教えている。使用困難な古い福祉用具は、部品として再利用するために解体される。

### 市民全員が

### 「ドライバー」ボランティア

近隣地域で十年以上にわたり奉仕活動を続けている徐建發（シュー・ジェンファ）さんは、こう気づいたそうだ。

近所の人が皆年を取り、老いた台湾社会の状況を呈していく中で、かつては尋ねて来る人は少なく、ほとんどの場合、ボランティアに家庭訪問してもらい、こちらから提供していたが、「今ではロコミで広まり、どこで中古の福祉用具を回収・提供しているかを知っていて、自分でネットを使ってプラットフォームで申請するようになりました」。

新しい福祉用具は高価なため、エコ福祉用具をレンタルするのが一般的になりつつある。高齢者の人生の余生の時間は長短さまざまであるが、福祉用具プラットフォームに申請が入ると、大型の医療用ベッドは機能確認のために三〜五日ほどかかる以外、車椅子や手すり、歩行器などはいつでも準備されており、数時間以内に配送することができる。彼らの作



わずか半日で、10人以上のボランティアが数10脚のシャワーチェアを洗浄し消毒した。天気の良い日を利用して日光に当てて乾燥させた後、屋内で一つひとつ点検と細部の修繕を行う。地域の奉仕には十分な人手が必要だ。

業は、行政機関で手続きするよりも迅速かつ柔軟である。

ボランティアはエコ福祉用具をトラックいっぱい積み、どんなに遠くても各家庭へ届けることを厭わない。それによって、支援が必要な家庭の人に直接会うことができ、他に何か必要としているものはないか、と尋ねることができるからだ。「おせっかい」は屋内から屋外にまで行きわたり、あらゆる安全状況を確認し、全体的な環境を点検する。安全は一つの要素が崩れると全体に影響し、心身ともに影響するのだ。

二百九十七の郷鎮で活動が展開され、一万一千三百六十五軒の修繕を完了した。福祉用具は十三万八千六百三十九件が提供され、延べ九万一千九百三十一世帯が恩恵を受け、節約できた社会的コストは十一・六億台湾元に上った。

私たちが求めているものは多くない。洗面台に取り付けられた小さなW字型手すりや、壁に設置された折りたたみ式シャワーチェアがあれば、高齢者は毎日便利で快適に、すっきりした時間を過ごすことができるのである。手すりが一本あれば、トイレや部屋の出入りを自力で

## 手すりで保たれる尊厳

二〇一一年、台湾が高齢化社会に進む中、慈済ボランティアは花蓮をモデル地区とし、自主的に村長や里長に頼んで里長の案内の下に訪問を行い、居住環境の改善が必要な家庭を報告してもらう、という地域の自発性とレジリエンスを高める取り組みを進めた。これは二〇一九年まで続いた。二〇二〇年には「安美プロジェクト」が正式に始動し、宜蘭・花蓮・台東から台湾全土へと拡大し、これまでに二十二県の行うことができ、「誰か」に頼らなくても済む。これも、人として最低限の尊厳ではないだろうか。

担当者の陳珮甄（チェン・ペイジン）さんは、感想をこう語った。台湾は小さなところだが、地域ごとに高齢者の生活ニーズや特性は異なる。都市部では選択肢も資源も豊富だが、南部の農村では高齢者が分散して一人暮らしをしており、ましてや「手が届きにくい」離島などでは、民間団体による地域密着型の支援が必要である。手を伸ばして掴める一本の手すりがあるかどうかから、心の奥に潜



む、老後の孤独や無力感といった課題を  
発掘することこそが、安美プロジェクト  
の次なる段階——「家族が家族を支え、  
隣人が隣人を支える」取り組みなのであ  
る。(経典雑誌三三四期より)

百年以上の歴史を持つ青桐駅とローカル線は、  
かつて石炭輸送に使われ、後に旅客・貨物兼用  
になった。倉明珠さんとご主人の仕事と生活に  
なくてはならないものだったが、視力を失った  
今彼女は聴覚を頼りに、列車の往来を感じ取る  
ことができる。

# 蟠りの無い心

◎文・釋徳夙ノ訳・濟蓮

物事に執着せず、人に心を乱されず、  
どうすれば自分の心の葛藤を解決できるかを知るべきです。



宗教の分け隔てなく、

誠意で接する

十一月二十五日、メキシコから台湾  
に戻ったばかりの宮建処顧問の林敏朝  
(リン・ミンツアオ) 師兄は上人に、モレ  
ロス州ホフトウラ市で慈済が支援建設し  
ているカトリック・モレロス総合学校の

校舎の進捗状況を報告しました。モレロ  
ス総合学校は、二〇一七年九月のメキシ  
コ大地震によって大きな被害を受け、慈  
済の支援によって校舎の建て替えが行わ  
れています。二〇一八年十二月、シスター・  
マルタと校長のシスター・アデリナ及び  
建築士のパブロ・ヴァラダレス氏が台湾  
に来て上人に面会しました。上人は、「慈

済が世界でこれほど多くの事を成して来  
られたのは、大衆が慈済を信じてくれた  
からであり、愛の力を結集させ、成就で  
きたのです」と話しました。

そして次のように言いました。「慈済が  
支援して、メルセダリアス修道女会の学  
校校舎の建設を行っています。慈済の  
ために何かを求めたことはなく、お互い  
に誠意を以て交流しています。「私たち  
は見返りを求めない奉仕をしており、与  
える側に誠意があれば、受け取る側も  
誠意を以て感謝の気持ちを表します。  
学校校舎はしっかりしたものを建てなけ

ればなりません。ですから、宗教は分け  
隔てなく、意義のあることを、心を一つ  
にして、誠意を以て成し遂げることが大  
事です」。

「仏教の観点から見れば、いつも世の衆  
生のために奉仕すべきです。世の衆生の  
平穏を望むなら、この世を平和に保つべ  
きです。そして、この目標を達成したい  
のならば、教育が必要になります。教育  
はこの世の希望であり、慈済はその分野  
で奉仕し、子供たちに安全な良い環境の  
中で良い教育を受けさせることができ  
ば、とても価値があると言えます」。



## 柔和忍辱はこの世を平和にする

今年、慈済が世界中で行っている慈善支援の対象に、パキスタン、チャド、トーゴの三カ国が加わりました。十一月二十六日、上人は新竹連絡所を訪れ、歳末祝福会と認証授与式典の中で、全世界の慈済

エチオピアは干ばつの影響で食糧不足に陥っている上に、内戦のために人々の生活は困窮を極め、住まいを追われている。慈済基金会は現地の慈善団体「キドミア」(KIDMIA)と協力して、デブレ・ベルハン郡の3つの難民キャンプに食糧バックを配付して支援した。3000世帯に対する配付は2段階に分け、第一段階は7月16日にバカロ難民キャンプの1100世帯を対象に、1世帯当たり小麦粉50キロ、食用油3リットルを難民に配付した。

人が大愛を広め、益々多くの国と地域で苦難にある人々を支援していることに感謝すると共に、師兄や師姉たちが日々精進し、志業を受け継いでいくようにと励ましました。

慈済から支援を受けた国の人々は、慈善支援を必要としています。資源が不足して貧しいだけでなく、国や社会が不安定なため、各方面で発展することが難しくなっているからです。上人は皆さんに、台湾で暮らしている縁を大切に、平和と平穏な社会を大切にして、人同士が和気藹々にならなければなりません。人と人が仲睦まじく接すれば、家庭が和やか

になり、和やかな家庭では良い躰ができ、社会に出れば、他の人と団結するようになり、一緒に愛の力を発揮して、貧しく苦難にある人を助けるようになります。実際、発達した国にも貧しい人はいます。貧しい人がいる限り、愛を携えた人はいないので」と言いました。

上人は、まだ自在に行動できる時間を逃さず、できる限り志業に打ち込み、歩める間に歩幅を大きくして前進するように、と高齢のベテラン慈済人を励ましました。「体が高齢になるにつれ、衰えるのは避けられませんが、心と頭は老けないようにしなければいけません」。

「私たちは精進し続けると共に、若い人  
たちを励まし、愛を伝承していかなけれ  
ばなりません。各家庭が愛を伝えてこそ、  
台湾の平穏と平和を守っていくことがで  
きるのです。ここ数十年、慈済人は、至る  
所で愛の募金活動を行うと共に、人々に  
善行と親孝行をするよう励ましています  
が、その効果は既に表れ始めており、地  
域の調和、社会の平安に役立っています。  
私たちが以前、台湾社会のために努力  
したことを忘れず、次の世代に伝承して  
いってください」。

「私たちは仏陀の時代と既に二千五百  
年余りも隔たっていますが、幸いにも仏  
陀の精神を伝承することができるので

えているのは、蟠りのない心で、自分と  
縁のない人に会った時でも相手の話に耳  
を傾ければ、心が乱されることはありません。  
どうすれば自分の心の葛藤を解決  
できるかを心得てください」。

『諸法は空を座と為す』という言葉の  
通り、何事にも執着しないことです。智慧  
を以て判断し、大衆を利する善法である  
と分かれば、心して学ぶと共に、絶えず  
伝承し、人々に善行して愛を携えていく  
よう、呼びかけなければなりません。社  
会には問題がとても多いので、私たちに  
好い縁があるなら、家庭円満と和やかな

す。慈済は常に仏陀の精神に従って、皆が  
『仏教の為、衆生の為』に励み、人間（じ  
んかん）に善、愛、孝行心、仏陀の教育を  
伝えています。ですから、皆さんはしっか  
りと社会に奉仕しなければいけません」。

上人は、「仏陀の教育は慈悲喜捨であ  
り、大慈悲を以てこの世に愛を満たし、柔  
和な話し方を身につけ、お互いに称賛し  
合わなければなりません。もし誰かが間  
違いを犯したら、方便法を使って彼らに  
近づき、彼らが変わるよう導くのです。彼  
らも他の人を称賛し、お互いに愛し、助  
け合えば、社会の雰囲気は調和の取れた  
ものになるでしょう」と言いました。「あ  
なたたちに『柔和忍辱服』を着るよう教

近隣関係を人々に呼びかければ、調和の  
取れた社会を築くことができます。これ  
こそが私たちの幸せなのです」。

上人は、「慈済で法縁者に対するだけで  
なく、家庭でも同じように家族に接すれ  
ば、家庭は仲睦まじくなります。肉親だか  
らいい加減でいいと思っではいけません。  
家族にも感謝すると共に、尊重し、礼儀  
正しく、愛を以て接するべきで、これが  
良いしつけのある家庭なのです。もし、そ  
れぞれの家庭が感謝と尊重、愛に満ちる  
ようになれば、その地域はとても美しくな  
るでしょう」。(慈済月刊七一〇期より)

## 台湾 Taiwan

● 花蓮慈濟病院は2019年から、「愛には障害も傷もない」と題した、遠隔地オンライン傷口ケアプロジェクトを推進しており、花東縱谷と沿岸の25の町をカバーし、6年間で1、100人以上の患者を受け入れ、延べ1万人以上に奉仕している。映像記録装置と傷口ケアアプリ、ケース追跡システムを組み合わせ、在宅看護師がリアルタイムで専門的な指導を受けられるようにしている。今年1月に臨床成果を表し、傷口の治癒率は51%から76%に向上し、傷口面積の縮小率は66%を超え、敗血症と再入院はほぼゼロで、遠隔監視システムによって、通常7カ月かかる傷口が3カ月以内に治癒した。

● 嘉義県の責任型認知症ケアセンター「拾憶樂園」（記憶を取り戻す樂園）は、1月26日に大林慈濟病院に移転し、医療と介護の資源を統合して、軽度の認知症や

情緒行為症状を持つ高齢者に専門的なケアを提供している。非薬物治療を通じて精神面及び活動能力を改善し、介護サービスと結びつけて悪化を遅らせると共に、自立能力を維持するようにしていると同時に、家族による介護も支援している。

● 慈濟メディア人文志業基金会は、「行願60・温故知新妙顕法華」というテーマで2026台北国際書展に参加し、證嚴法師が20代の頃に手書きした『法華経』や、国立台湾図書館が数年かけて修復した貴重な古書を展示した。（2月3日～8日）

## 中国 China

● 2025年12月から2026年1月にかけて「冬季に暖を届ける活動」を行った。摂氏マイナス20度を下回るハルビンでも、17年間縁が続いてきた福建省漳州市薌城区でも、同じ省或いは近隣省のボランティアが集中的に、または戸別訪問の形で、26の省と直轄市の1万8千の弱者世帯に、防寒衣類と食糧などを贈呈した。

## シリア Syria

- シリアの内戦は終結したが、住居やインフラの壊滅的な状態は復旧が難しい。慈済は、イドリブ県知事が冬の到来前に要望していた、「貧困世帯への毛布の提供」に応え、国際的な人道支援を始動した。2カ月半の調整と通関を経て、4千枚の毛布がトルコからシリアに輸送され、1月12日と13日に2つのテント区域で2,064世帯の約9,529人に配付された。

## ケニア Kenya

### シリンレオネ Sierra Leone

(1月19日～2月10日)

- 慈済基金会のチームはシエラレオネに赴き、慈善支援プロジェクトを展開した。現地のパートナーと共にコミュニティ防災、農業発展、女性職業訓練などの進捗を目にした。その後、ケニアに移動し、イスラエル人道救援団体のカクマ難民キャンプ計画とナイロビのスラム街環境改善計画に関心を寄せた。

## カンボジア Cambodia

- カンボジア首相青年ボランティア医師協会 (TYDA) 及びカンボジア青年連合会 (UYFC) と協力し、プノンペン周辺のダンコールゴミ埋立地で、周辺の生活困難な家庭に年末の祝福と物資の配付を行い、707世帯に米、食用油、麺類、エコ毛布などが贈られた。(1月25日)

## フィリピン Philippines

- 台風25号の緊急支援第2段階として、主にコンポステラ町とコンソラシオン町を対象に、家庭の構成人数に応じて2万から3万ペソを配付し、160世帯が恩恵を受けた。(1月31日)

## パラグアイ Paraguay

- シウダ・デル・エステ市のエニロとビヤフコミュニティに強制移住させられた原住民のグアラニ族は、居住地が湿地帯で、ゴミ埋立地の近くにあるため、

68世帯が日常的にゴミの中からリサイクルできる物を探して収入に変えている。慈済ボランテアは1月18日に訪問し、2月1日に基本的な生活維持に必要な米、小麦粉、豆類、食用油、粉ミルク、野菜の種を提供した。

## ベトナム Vietnam

● ハテイン省の外事庁、赤十字社と協力して、ハテイン省で冬季の配付活動を行い、800世帯に米、毛布、慰問金50万ドンを贈呈した。支援の縁は2020年末に遡る。慈済はハテイン省とクアンビン省の水害支援を行い、その後5年間にわたって台湾商工会と協力して、貧困救済と教育支援を行ってきた。2025年、慈済は政府に、ハテイン省を慈善奉仕範囲に入れることを申請し、今回は許可後の初めての活動である。(1月31日～2月1日)

## モザンビーク Mozambique

● ソファアラ、マプト、ナンプラなどの7州は1月からの豪雨により、18万世帯余りが被災し、ボランテアは1月下旬に首都マプトで復旧活動を行った。5つのコミュニティで12回の大規模な清掃を行い、延べ1,567人を動員した。2月上旬には1,318の被災世帯に食糧と生活物資を配付し、医療チームは15回の施療を行って、2,198人を診察した。ソファアラ州では、被災者に種と農耕用具を贈呈して支援した。甚大被災地区のガザ州では、詳細な調査を行い、今後の配付活動を企画した。

## ザンビア Zambia

● 首都ルサカのいくつかのコミュニティは昨年の豪雨で被災し、地下水源が汚染された上に、環境の汚染で、コレラやチフスなどの感染症が発生している。ボランテアは1月20日から24日まで被災状況を調査し、被災地区の清掃、物資の配付、被災したボランテアの家の修繕などの支援活動を開始する。

# 各国の連絡所

## 本部

971 花蓮県新城郷康樂  
村精舎街 88 巷 1 号  
TEL: 886-3-8266779/886-3-8059966  
志業センター (静思堂)  
970 花蓮市中央路三段 703 号  
TEL: 886-40510777 # 4002  
0912-412-600 # 4002

## アメリカ

総支部 (San Dimas)  
TEL: 1-909-4477799  
北カリフォルニア支部  
TEL: 1-408-4576969  
ニューヨーク支部  
(New York)  
TEL: 1-718-8880866

## 香港

TEL: 852-28937166  
フィリピン Manila  
TEL: 63-2-7320001  
タイ Bangkok  
TEL: 66-2-3281161-3

花蓮慈済医学センター  
970 花蓮市中央路三段 707 号  
TEL: 886-3-8561825

玉里慈済病院  
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号  
TEL: 886-3-8882718

関山慈済病院  
956 台東県関山镇和平路 125-5 号  
TEL: 886-89-814880

大林慈済病院  
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号  
TEL: 886-5-2648000

台北慈済病院  
231 新北市新店区建国路 289 号  
TEL: 886-2-66289779

台中慈済病院  
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号  
TEL: 886-4-36060666

斗六慈済病院  
640 雲林県斗六市雲林路2段248号  
TEL: 886-5-5372000

## 慈済大学

970 花蓮市中央路三段 701 号  
TEL: 886-3-8565301

## 台北支部 (新店静思堂)

231 新北市新店区建国路 279 号  
TEL: 886-2-22187770  
慈済人文志業センター

112 台北市立德路 8 号  
大愛テレビ局  
TEL: 886-2-28989000

静思人文  
TEL: 886-2-28989888

## カナダ Vancouver

TEL: 1-604-2667699

## メキシコ Mexicali

TEL: 1-760-7688998

## ドミニカ Santo Domingo

TEL: 1-809-5300972

## ブラジル Sao Paulo

TEL: 55-11-55394091

## イギリス London

TEL: 44-20-88699864

## フランス Paris

TEL: 33-1-45860312

## ドイツ Hamburg

TEL: 49 (40) 388439

## オランダ Amsterdam

TEL: 31-629-577511

## スウェーデン Goteborg

TEL: 46-31-227883

## オーストリア Vienna

携帯: 43-6602053428

## 南アフリカ Gauteng

TEL: 27-11-4503365

## 中国蘇州

TEL: 86-512-80990980

## ベトナム Hochiminh

TEL: 84-8-38535001

## ミャンマー Yangon

TEL: 95-9-260032810

## マレーシア

セラランゴール支部 KL

TEL: 603-62563800

ペナン支部 Penang

TEL: 604-2281013

## シンガポール

TEL: 65-65829958

## インドネシア Jakarta

TEL: 62-21-5055999

大愛テレビ局

TEL: 62-21-50558889

## スリランカ Hambantota

TEL: 94 (0) 472256422

## ヨルダン Amman

TEL: 962-6-5817305

## トルコ Istanbul

TEL: 90-212-4225802

## オーストラリア Sydney

TEL: 61-2-98747666

## ニュージーランド

Auckland

TEL: 64-9-2716976

# 慈済

2026年3月20日発行・351号

中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄

Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴

発行所 慈済伝播人文志業基金会

〒112 台湾台北市北投区立德路8号

編集 慈済日本語翻訳チーム

杜張瑤珍・陳植英・黒川章子・王麗雪

電話 (886)02-2898-9000

FAX (886)02-2898-9994

E-mail: 021620@daaitv.com

慈済基金会日本支部

〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-2-16

電話 (03)3203-5651 ~ 5653

FAX (03)3203-5674

E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw

tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示をいただければ幸いです。(日文組編集同人)



## 国際的組織による医療リレー 戦下のガザで小児がん患者一家を支援

イスラエルとハマスの衝突が起きて2年間、ガザ地区では6万8千人が犠牲になったが、その4分の1が子どもであり、さらに190万人が住まいを追われた。激しい戦火により、ガザ地区にあるがん治療病院はすべて破壊された。小児がんを患う子どもたちは緊急の治療を必要としているため、複数の国際的医療・慈善団体が、小児がん患者とその家族をリレー式にヨルダンのアンマンへ移送した。慈済も要請に応じて歯科の施療を提供し、深刻な困難に陥っている彼らに、ひとときの安らぎとケアを届けた。



慈済日本サイト



慈済ものがたり